

#### 第4章 「男子トイレの花子さん」

昼休みの50分間をフルに使ってしまった。

「ここまでにしようか」

「はい」

次は10分の校内清掃時間。

とりあえず新聞の記事を切り抜き保管室を後にする。

図書室を出る時に浩平に声を掛ける。

「清掃だぞ」

「図書当番は図書室の掃除をせねばならない。悪いが、後は頼んだぞ。」

結局、僕一人でやるのか…

しようがないと思いつつ掃除場所はどこだったかと思いつく。

確か今日は月曜日、清掃場所が変わる日。

「あ」

「どうしたんですか？」

タイミングがいいのか悪いのか。

今日から1週間僕の掃除場所は花子さん住居教室棟3階の男子トイレ。

もう掃除の時間が始まっているので急ぎ足で清掃場所へと向かう。

トイレのドアを開けると男子トイレ特有の匂いが鼻を突いた。

到着はしたが清掃をやる気は毛頭なかった。後ろをついてきたメリーさんが言う。

「花子さん、私ですけどー」

すると誰もいないはずの奥の個室から声がした。

「おう！メリーか」

ゆっくりと個室から女の子が出てきた。タバコを啜え、けだるそうな顔。

髪型はポニーテール。服装はシンプルな黒のセーターにハーフパンツというラフな格好、そして：

「ちっさっ！」

「ちっさいいな！誰だお前」

僕もそんなに背が高い方ではないが背の低いメリーさんよりさらに低い。

「花子さん。この人がさっき話した協力してくれる方です」

「はっお前がか、頼りねえな」

ポニーテールの花さんはジト目で紫煙を吹かしながら言う。

「小学生がタバコを吸うのはよろしくないと思うよ」

「私しや20だ！」

すごい剣幕で言い返された。

そのルックス、その身長。どうみても小学生にしか見えない。

とりあえずこれ以上ややこしくなるので仮にも信じてやる事にした

「その自称20さんが花子さん？」

「自称はいらねえよ。ムカつく奴だな」

ツリ目の花さんはご立腹の様子だ。

「そうです、その人が花子さんですよ」

メリーさんがフォローを入れる。

「そういや、おまえ今朝見たな。ちよつと耳かせ」

僕はそばに寄って花子さんの横に立った。花子さんが何か言いたげな表情をしている。

僕は何のことかわからず首をかしげていると観念したように花子さんは言った。

「…しやがめ」

ああ、耳までとどかないのかと理解し、僕はその場にしやがんだ。

花子さんの口が耳に近づく。吐息が耳に当たってくすぐりたい。

そして花子さんはこう言った。

「今朝見たぜ。この〇〇」

瞬間僕の心臓は大きく跳ね上がった。このちびっ子が一番気にしている事を！

僕は男としてこの自称20の小学生に敗北を喫した。

「かははは！ちびって言った罰だ、滞在期間3日分GETだぜ」

「…どうやら敵になるしかないようだな」

と、ここで試合終了がごとく掃除終了のチャイムが鳴った。

「この勝負おあずけだ。」

そういい残して扉へと向かう。

メリーさんを先頭に外へ出ようとしたが花子さんに呼び止められた。

「おい！ちゃんと見つけてやれよ」

「言われなくとも」

僕はそう言ってトイレのドアを閉めた。

「今、なんていったんですか？」

メリーさんがその黒い瞳で尋ねてくる。

「いや、なんでもないよ」

5、6時間目はメリーさんは辺りを散歩してくるのだという。別れを告げ、メリーさんは中庭の方へ歩いて行った。僕は睡魔に身をまかせ寝ることにする。

古典の文法なんてなんに使うんだと考えながら、気がつくまで夢の中にいた。

メリーさんがいる。

夢の中ではメリーさんは中山准として普通に生活してた。

普通に学校の制服を来て本を読んでいる。本を読みながらにこにこしてとても楽しそうだ。でもなぜか僕は悲しくなった。

夢でしか会えない中山准。

その時突然夢から覚めた。

夢から覚めると僕は泣いているのに気づく。

自分の涙で起きるなんてどんだけだよと突っ込みを入れる。

あれ？なんで泣いてるんだっけ。

さっき見た夢を思い出せないまま放課後を迎えた。